

一八六二年の火事で檀那寺に避難した際に恋仲になった寺小姓に再会できると思い放火、捕まって火刑に処された。井原西鶴が『好色五人女』に書き、また歌舞伎・浄瑠璃の多数の作に脚色された。朋子とお七を重ね合わせた絵で『煤煙』終幕を飾りたいということは、あるいは執筆当初からの作者の願望で、冒頭に「繩附」の男女(↓2頁2の注、補注4)を登場させたのも、掉尾のお七との呼応というところが念頭にあつたのかもかもしれない。事件当時から「新」執筆のころにかけての草平の女性の見方、恋や心中をめぐつてのファンタジーがこの虚構に反映していると見てよからう。その「愛と死のロマンティズム」の根底的な部分に、舶来のデカダン文学よりむしろ江戸文芸的な世界が根強く生きていたことを、このシーンは証している。↓補注30。

## 65 らいてうの語る結末

短刀を谷底へ投げ捨てるという要吉の行為(409頁6)は、新では文字通りの最終段落、わずか3行に完結に記述されるのみで、それが引き起こすことの叙述はもちろん全くないまま小説が閉じられる(↓410頁9-412頁4の注)。単以降は、この場面をやや前に出すことで、その行為に要吉が託す意味やそれへの朋子の反応等をも示唆しつつ幕を引く、という形が可能となったといえる。ただ、そこでもなお、ここで要吉に湧いた「私は生きるんだ」云々の新しい心理は

いかにも唐突で説得力を欠くし、朋子がまたそれをさしたる抵抗なく受け入れるように見える点もまたしかりで、長編の終結として力あるものとは言いにくい。これに相当する「事実」を回想するらいてうは、次のように書いている。

「僕は意気地のない人間なのだ、人を殺すことなどできない、あなたなら殺せるかと思つたんだけど、だめだ」といって、鞘をはらつても見ないで、いきなり懐剣をふり上げて谿谷に向かって投げ捨てました。／わたくしは腹だたしさと、一種の挫折感とも、なんともいいようなない思いに襲われて、母の秘蔵の懐剣を永久に呑んでしまった暗い雪の谷底に躍び込みたいような衝動を抑えて、見えない谷底を見すえて立っていました。」そして、「金のあるうちだけ生きて野たれ死にするのだ」などと言いなから雪の上にならずにまいった草平を見て、態度と立場を一変させた彼女は、「先生を励まして、なんでも峠まで強行しよう。死ぬも、生きるも問題外と、雪の道を先に立って歩き出した」のだという。(『元始』上、236-237頁) また最後のシーン(410頁9-411頁4)に相当する「事実」は、『元始』によれば、次のようである。草平が動けなくなったので、「灌木の根方をわけ、雪を払って坐をつくり、そこでわたくしは先生を守って夜を明かす決心をし」た。きびしい冷えがしみてくるのだが、疲れと酔いで草平はすぐうとうととしてしまい、「先生こそ凍死しそうだ」と氣遣われてなりません(237-238頁)。

そしてこのときに見た「雪の連峰」の「荘厳さ」を語るのだが、その描写は『道』でのそれの方が周到である。

この夜、この峠の頂で、この眼で見た月光のなかに照らしだされたまばゆいばかりの氷の山々の大パノラマ！ 荘厳、華麗な限りをつくした大自然の光の芸術は、私の心に深く刻まれて、一生忘れることのできない至誠、至美なるもの一つとなりました。

透明な暗碧の夜空から音もなく落ちる幾筋もの滝のようにかかる遠くの連峰、その大傾斜、大豁谷が反射する明暗限らない光の複雑さ。ダイヤを、真珠を、オパールを無数に撒き散らしたような近くの氷雪の山々。水晶の大宮殿のまった中にすわった私は、何ともいいようのない有頂天な幸福感にひたっていました。そして命をかけてきた自分がわかったような満足感を同時に味わいました。

後になって、私はいくたびかこの寂光世界のすばらしさの片貌でもかきたいと企てましたけれど、けっきょく私の筆では、それは齒のたたないことなのを知ってあきらめました。(森田先生の創作『煤烟』の中にあるこの描写は僅かに二行たらず、名文には違いありませんまいが、私のあの夜の感銘からすればあまりに物足りない死文字に思われます。)

(68-69頁)

## 66 「理解」なき終結とヴァイニング―理論

「理解」のあきらめ(↓319頁9-11の注)と「敵意」への帰着(↓補注63)という結論において、新と単以降とで変更があるわけではないが、エンディングに託された、その結論の受けとめ方における情感といったものには、差異が明白である。すなわち、連山も朋子も「死」に接したものととして描かれ、文体的にも沈んだ感じであった新に対して、単での改稿は、「生」に向かう、むしろ明るくい力強さを感じさせるもので、ほとんど対照的でさえある。「もつと歩きませう」と生気十分の女が、「氷獄」を見るといがかねてよりの「夢」をついに実現させたということが、やや唐突ながら舞台の中心に持って来られ、女をここまで連れてきたはずの男は逆に「女に伴れられて」来たものとされる。それでも「歓喜の情が湧」き、「何にも言ふことはない」と思うという終結は、「智的闘争」(↓補注37)の敗北による「主人公」地位の譲渡(353頁5-6)の完成を告げたものとも読める。

小説を「事実」に近づけるとともに、作品の性質を死臭漂うデカダン小説から「大正教養派」的な人道主義や「新しい女」の隆盛に影響された多少とも理想主義的な作品へと微妙に移行させるといふ側面もあり、「最う可い、最う可い！」(410頁11-12)のあたりには、「理解」できないままでよい、という開き直りから来る明るさも感じられる。